



Save the Children

東日本大震災から**10年**
いま伝えたい思い



ごあいさつ

2021年3月で、未曾有の被害をもたらした東日本大震災から10年が経ちました。

セーブ・ザ・チルドレンは、震災直後から2015年12月までの5年間、岩手県遠野市、宮城県仙台市、福島県会津若松市に事務所を置き、東北の子どもの声を聴き、子どもたちとともに、子どもを中心に据えた復興支援事業を行いました。そして、2016年以降も、東北の子どもの支援を継続するとともに、国内の自然災害の被災地での緊急支援を含む、日本国内の子どもたちを取り巻く課題解決のための事業に取り組んできました。

震災から10年、その間も日本各地で地震や豪雨などの自然災害が毎年のように起こり甚大な被害が出ています。「過去最大クラスの豪雨、何十年ぶりの被害」という言葉も毎年のように聞くようになりました。そして、この瞬間も新型コロナウイルス感染症拡大のなかで、大人も子どもも大きな影響を受けています。

震災10年の今、私たちの東日本大震災緊急・復興支援事業での活動を振り返り、そして将来の災害へ備えるために、私たちが支援事業のなかで活動をともにしてきた子どもたち、地域、企業の皆さんに当時の活動や、現在の様子について話をうかがいました。

メッセージのなかで、「子どもの意見を聴くこと」、「地域の復興に子どもが主体的に参加すること」の重要性も述べられています。それらの経験も生かし、子どもの権利に基づいた新型コロナウイルス感染症対応をはじめ、将来おこりうる災害時の支援のあり方を皆さんと一緒に考える機会になれば幸いです。

新型コロナウイルス感染症拡大によるさまざまな制約があるなかで、ご協力いただいたすべての方々にご場を借りて御礼申し上げます。

これからも、私たちセーブ・ザ・チルドレンはすべての子どもの生きる・育つ・守られる・参加する「子どもの権利」が実現された世界を目指して、日本を含む世界各地で子どもたちとともに、子どもたちのための活動を続けてまいります。

今後ともあたたかいご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

2021年3月11日
公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
専務理事・事務局長 三好 集

目次

ごあいさつ	2
東日本大震災緊急・復興支援 東北の子どもたちとともに	3
私たちのストーリー	
子どもたちのストーリー	4
地域の人たちのストーリー	9
企業の人たちのストーリー	12
スタッフの声	14

東日本大震災緊急・復興支援 東北の子どもたちとともに

東日本大震災の発生直後に東北で活動を始めてから2015年12月まで、セーブ・ザ・チルドレンは常に子どもたちに寄り添い、子どもたちとともに次の6つの分野で復興支援に取り組みました。

子どもたちの声を聴きながら、復興への取り組みを進めました。

教育

学校再開に伴い、学用品の配布や給食の補食支援を実施。また、教育の機会が確保されるよう、給付型奨学金の提供や、部活動・課外活動への支援を行いました。

子どもの保護

安心・安全に遊び、学び、成長できるように。学童保育施設や公園など、子どもの居場所を整備したほか、研修を通じて、学童保育の質の向上を支援しました。

福島

比較的空間線量の低い地域で、外遊びの機会を提供。また学校で、放射能について学び、自ら判断する力を養うワークショップを実施しました。

コミュニティ・イニシアチブ

地域の NPO が子ども・子育て支援活動を継続できるよう、資金、組織基盤強化、子どもの権利普及の側面から支援しました。

防災

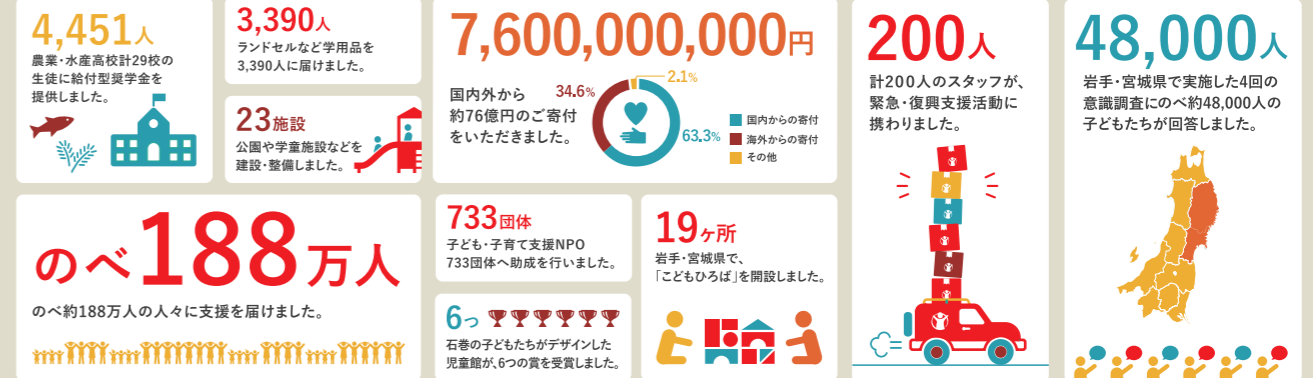
学校・学童保育などへ防災用品を配布。防災教育教材の開発、研修の実施や防災イベントなどの支援を通じ、学校と地域が連携した防災の取り組みを推進しました。

子どもにやさしい地域づくり

子どもたちが復興の主体となることを目指して。行政や地域と連携して子どもたちがまちづくりに取り組み、政策決定者に提言できるよう、子どもたちを支援しました。



数字で振り返る支援活動



2016年以降は東日本大震災緊急・復興支援の知見と経験、行政や地域とのネットワークを生かし、東北地方沿岸部で、子どもたちが安心して学校生活を送ることができるよう給付金の提供を行いました。また、放射能リテラシー分野において子ども向けハンドブックを発行し、福島県内の公立中学校への配布、教員や民間団体向けのワークショップを通じた普及活動なども行いました。



私たちのストーリー

セーブ・ザ・チルドレンが2011年から2015年12月にかけて一緒に活動した子どもたちや、子どもたちを支えた地域の人たち、企業の人たちにインタビューをしました。私たちと一緒にいった活動についてどのように感じているか、そして、現在の想いをお伝えします。

*年齢や肩書はインタビュー当時(2020年10月から11月頃)のもので、*子どもにとって安心・安全な組織活動を目指す観点から子どもたちの本名は掲載していません。*私たちのストーリーで紹介したインタビューの内容は、インタビュー対象者の経験や感じたこと、見解に基づいたものです。

子どもまちづくりクラブ

東日本大震災復興支援として、岩手県山田町・陸前高田市、宮城県石巻市の3地域において、小学校5年生から高校生の子どもたちが月2〜3回定期的に集まり、行政や地域の人たち、専門家と話し合いながらまちづくりに取り組みました。また、2011年から2015年にかけて毎年夏に3地域の子供たちが集まり、お互いの活動を共有、話し合い、まちづくりに参考となる施設や取り組みを学ぶ「子どもまちづくりリーダーツアー」を計5回実施しました。

岩手県山田町では子どもたちが企画・デザインした子どもの居場所と図書館の機能をもつ「山田町ふれあいセンター」を建設しました。岩手県陸前高田市では、仮設商店街内に復興のシンボルとしてのモニュメント、「『ミニ』あかりの木」を子どもたちが企画・デザイン・制作しました。

宮城県石巻市では、子どもたちが企画・デザインした児童館「石巻市子どもセンター らいつ」を建設。2013年12月の石巻市こどもセンター完成とともに、センターの活動として移管されました(石巻市子どもまちづくりクラブは、2014年1月から、らいつの事業として活動)。セーブ・ザ・チルドレンは、石巻市子どもセンター運営サポートの一環として、移管後もまちづくりクラブの活動をサポートしました。



山田町ふれあいセンター



『ミニ』あかりの木



石巻市子どもセンター

子どもたちのストーリー

子どもたちの意見を地域のまちづくりに

カッキー(「子どもまちづくりクラブ」(岩手県山田町)に参加)
会社員 23歳



「子どもまちづくりクラブ」の活動で自分たちの意見を山田町の町長さんに伝えたり、皆で町民や県外からの観光客に「どうしたら山田町がもっとよくなるか」というインタビューをしたりしたことが印象に残っています。「子どもまちづくりクラブ」の活動に参加してから、自分で何かしたいと思ったら自分から行動を起こすことができるようになったと思います。

家が被災したので、しばらく山田町の避難所で生活していたのですが壁などで個人のスペースが確保されていなかったのが、勉強する環境がなくて苦労しました。そのとき、避難所でも勉強ができそうなスペースを友人と探し、周りの大人たちにも事情を説明して、交渉して勉強スペースを確保することができました。地域の防災や緊急支援、復興支援を考えるときに、その地域で被災した人たち、とくに子どもたちの意見をよく聞いて取り入れてほしいと思います。避難所で自分みたいに勉強がしたいけれど、そのスペースがなくて困っている子どもたちが大勢いるかもしれない。ひとつの避難所で改善できたことは、ほかの避難所でもできるはず。そうやって良い事例や経験をほかの避難所にも横展開してはどうか。



「子どもまちづくりクラブ」は私にとって安心して何でも言え、楽しく悩んだ場所でした

ひーちゃん(「子どもまちづくりクラブ」(岩手県山田町)に参加)
会社員 21歳



当時、私の周りでは、復興に向けてのさまざまな取り組みを考えたり、話し合ったりするときに「大人にまかせておけばいい」という雰囲気でした。しかし、母に誘われて山田町の子どもまちづくりクラブの活動報告会に参加し、私も「町の復興について話し合い、意見を出したい」と思いました。

2015年3月に仙台で開催された第3回国連防災世界会議に参加し、震災当時体験したことについて大勢の前で伝えました。スピーチの後、各国の参加者から声をかけられたり、新聞などで取り上げられたりしたので、自分たちの言葉で自分たちの経験や活動を発信することの意義を強く感じました。

また、「子どもまちづくりクラブ」は私にとって、安心して何でも言え、楽しく悩んだ場所でした。クラブには3つのルール「参加」「尊重」「守秘」があり、皆そのルールを守っていました。特に「尊重」は、最後まで人の話を聞くこと、人の意見を否定しないことが約束だったので相手の言葉を拒絶せずに聞き、自分の中でしっかりと消化してから話すことを心がけるようになりました。



今を生きる子どもたちに震災のこと、復興のことをわかりやすく伝承していきたい

あず(「子どもまちづくりクラブ」(岩手県陸前高田市)参加)
カメラマン 20歳



まちづくりクラブで開催した「進め!高田っ子!まちづくりフォト☆」(まちフォト☆)がとても印象に残っています。普段は子どもたちだけでは行けないような復興途中の場所へ入らせてもらい、自分たちがひかれた風景をひたすら撮影して発信しました。報告会で写真をパネルにして飾ったり、クリアファイルに写真を刷って近くの学校へ配布したりした活動も覚えています。自分の学校で、そのクリアファイルが配られている瞬間を見たときは、本当に誇らしい気分になりました。

また、まちづくりクラブの活動を通して「考える力」や「自分の発言に責任をもつ」習慣もついたと思います。皆まちづくりに本気なので、私もいつの間にか一生懸命考えて、つたない意見でも仲間のために意見を共有する、ということ意識するようになりました。仲間やセーブ・ザ・チルドレンのスタッフが意見を尊重してほめてくれたり、話を広げてくれたり、いつも話し合いがしやすい雰囲気だったことも私が成長できた要因のひとつだったと思います。

今後は今を生きる子どもたちにできるだけ震災当時のことや、自分たちの復興への取り組みなどをわかりやすく伝承していけたらと思っています。「まちフォト☆」のように、自分のまちを定期的に撮影して、発信したいとも考えています。



子どもたちが安心して意見を伝えられる居場所づくりを

たぐっちゃん(「子どもまちづくりクラブ」(岩手県陸前高田市)に参加)
会社員 23歳



「子どもまちづくりクラブ」のメンバーと仮設商店街内に復興のシンボルとしてのモニュメント、「『ミニ』あかりの木」を自分たちで企画・デザインし、制作したことをよく覚えています。子どもからお年寄りまで、誰でも団らんできるあたたかい場所をつくりたいという皆の思いから生まれ、陸前高田を照らすシンボル「あかり」となるように一という願いが込められています。

まちづくりクラブのような、学校も年齢も違う子どもたちが定期的に集まって、何かの活動を一緒にしたり、意見を交換したりできる場があって本当に楽しかったです。また、陸前高田の市長に私たちの要望をまとめた意見書を提出したときは、市長が熱心に私たちの話を聞いてくれて、子どもが行政にも意見を伝える機会があったことがとてもよかったです。

それから、まちづくりクラブのような場で被災の度合いに関係なく意見を交換することで、次第にいろいろな気持ちが整理されて心が穏やかになっていくことに気づきました。だから、まちづくりクラブのようなさまざまな環境のなかにある子どもたちが、安心して意見を伝えられる居場所の存在はとても大きく、話すことで子どもの心のケアになるのかなと感じています。このような子どもの居場所が災害後に常にあったらいいなと思っています。



防災があたり前の世界を守ることでできる命をもう二度と失わないために

ピーマコ(セーブ・ザ・チルドレンが開催したワークショップに参加)
団体職員 23歳



私は、中学2年生の時に震災を経験しました。自然の恐ろしさを目の当たりにしてから漠然と、何かまちの役に立ちたいと思っていました。通っていた高校の掲示板で、セーブ・ザ・チルドレンの「第2回『世界の防災に向けて、私たちが伝えたいこと!』ワークショップ」があると知り参加しました。同年代の参加者と夜通し語り合うなど、自分とは違う考え方や経験を持つ参加者との交流は良い刺激になりました。ワークショップのなかで「もし私が総理大臣になったら?」という発表のときに、私は「防災があたり前の世界『守ることのできる命を、もう二度と失わないために』」というスローガンを掲げました。防災がより日常に浸透していれば、守ることのできる命を失わずにすんだのではないかと思います、ずっと心に残っていました。

今は、NPO法人プラス・アーツの職員として、防災プロジェクトを企画しています。自然災害が発生したときの対応も重要ですが、やはり日常からの備えが大切です。防災を「やらなくてはならない」「難しい」ものとして捉えるのではなく、少しだけ視点を変えて日常生活を見直すことが重要だと考えています。日常に防災の視点を取り入れられた社会、防災があたり前の世界が実現できれば良いなと思っています。



子どもにも意見を言う権利やさまざまな権利があることを子どもたち自身が知ることが大切だと思います

どんちゃん(「子どもまちづくりクラブ」(宮城県石巻市)に参加)
団体職員 22歳



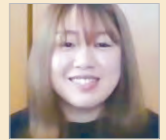
「石巻市子どもセンター らいつ」は、0歳から18歳までの幅広い年齢層が楽しめる、私たちの「夢」が詰まった場所です。「らいつ」の企画・デザインにあたり地元の人たちと一緒に活動してきたので、商店街をはじめ石巻市という地域の素晴らしさをあらためて実感しました。地域の人たち一人ひとりが「顔が見える」関係でつながっていて、この地域を支えています。そんな関係が私は居心地良く、大好きです。今でも「らいつ」の職員として子どもたちと一緒にイベントを企画し、実施しています。イベント企画などで、いろいろな職業、考えを持った人たちと知り合い一緒に活動をする機会が多いので、自分の成長にもつながる充実した日々を過ごせていると感じています。

地域の復興や防災の分野においても、子ども一人ひとりが意見を言う権利があるということを知らない子どもが多いと思います。「らいつ」では子どもたちが自分たちの権利について知ることができるように、毎年「子どもの権利月間」を設定してイベントを企画するなど、楽しく権利について学べるようにしています。子どもにも意見を言う権利やさまざまな権利があることを子どもたち自身が知ることが大切だと思っています。



震災を経験している私たちがまちづくりクラブの活動をつないでいくことで、後世に語り継いでいきたい

ネッティ(「子どもまちづくりクラブ」(宮城県石巻市)に参加)
大学生 21歳



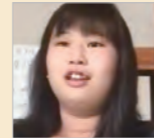
まちづくりクラブの活動には母の勧めで途中から参加しましたが、皆仲良くしてくれてすぐに打ち解けられました。毎回参加するたびに新しい発見や達成感があり、また来たいと思うくらい楽しい場所でした。大学生になった今も、「らいつ」のスタッフとして時々活動に参加しています。

私たちが企画・デザインした児童館「石巻市子どもセンター らいつ」は石巻市にあったらいいな、と思う場所を詰め込んだ居場所です。寝っ転がって本が読めるスペースやロックンロール(石=ロック、巻=ロール)の町、石巻の色をイメージした赤と黒の壁紙で仕切られた防音スペースなどが私のお気に入りです。「らいつ」ができてから、商店街に子どもや子連れのお母さん世代などが増えて活気が出てきたように思います。

震災から10年。復興が進み、被災地に暮らしていても当時の状況をうまく思い出せないこともあります。震災を経験していない地域の人たちや、私よりもっと若い世代の人たちは、だんだんと忘れてしまっているかもしれません。だから、震災を経験している私たちが「子どもまちづくりクラブ」の活動をつないでいくことで、後世に語り継いでいく必要があると思っています。今後も可能な限り、「らいつ」の活動や運営に関わっていきたいです。



やりたいと思ったことを自分から、積極的に行動を起こせるようになった
 マナヨ（「子どもまちづくりクラブ」(宮城県石巻市)に参加)
 大学生 21歳



私は、人前で意見を言ったり、グループで話し合ったりすることが苦手だったので、最初はまちづくりクラブの活動をしんどいな、と思うときもありました。それでも参加していくうちに、意見を言うことにも慣れてきて楽しくなりました。「石巻市子どもセンター らいつ」をつくる時に施設のレイアウトや壁紙の素材、色まで納得がいくまで皆と話し合いました。意見がまとまらず大変なときもあったので、完成したときは、本当にうれしかったです。

震災後、海外から来た大勢のボランティアの人たちと直接英語で会話する機会が増えてからは、英語を話したり、海外の人たちと交流したいと強く思うようになり短期留学をしました。そのとき、現地の学生と話す機会がありましたが、まちづくりクラブで培った「相手の話を聞き、そして自分の意見を伝える」という経験が本当に活かされていたと実感します。

「子どもまちづくりクラブ」のような、子どもが安心して意見が言えて、地域の復興に関われる活動がきっかけで変わっていく子もいるはずです。私自身も人前で話すことに抵抗がなくなったこと、そして自分がやりたいと思ったことを積極的に、自分から行動を起こせるようになったと思います。



**自分の意見を伝え、人の意見をしっかりと聞くことで
 多様な視点から物事を考えられるようになった**

レンレン（セーブ・ザ・チルドレンが開催したイベントなどに参加）
 高校生 17歳



姉（ネットィー）が子どもまちづくりクラブのメンバーとして活動していたので、家でもよく「石巻市子どもセンター らいつ」などの話が話題にあがっていました。当時は小学生でしたが姉の話を聞くうちに活動に興味を持ち、高学年になってから姉と一緒に活動に参加するようになりました。初めは、メンバーのなかで一番下の学年でしたが、学年が上のメンバーがやさしくて、いろいろ教えてくれました。人前で話すことが苦手だったのですが、「らいつ」のまちづくりクラブや、セーブ・ザ・チルドレンの活動に参加するようになってから自分の意見を人前で伝えることができるようになったと思います。自分の意見を伝えるだけでなく、人の意見も聞くことが大切で、人の意見をしっかりと聞くことで多様な視点から物事を考えられるようになったと思います。

今でも「らいつ」の活動に関わっていますが、参加する子どもたちのなかで、意見を言いづらそうにしている子や発表に慣れていない子がいたら、アドバイスを少しでも皆の前で自分の意見を伝えられるようサポートしています。また、震災を伝える人たちが少なくなり防災への意識が薄れてきていると感じることから、石巻の「今」を伝える映像を制作しSNSなどで配信することを皆で考えています。



自宅でも学校でもなく「自分が自分らしく」いられる第3の場所を
 ちゃんあゆ（セーブ・ザ・チルドレンが開催したイベントなどに参加）
 大学生 23歳



福島県の沿岸部に住んでいたため、震災当時原子力発電所の事故の影響を受けました。福島県では「子どもまちづくりクラブ」のような活動がなかったので、定期的に子どもたちが集まる機会はありませんでしたが、何度か子どもまちづくりサミットに参加しました。そして、「自分たちも何か発表がしたい」とセーブ・ザ・チルドレンのスタッフに相談し、福島県からの参加者5人で当時私たちが問題だと考えていた福島県の現状を伝える内容の劇を考え、子どもまちづくりサミットで発表しました。

災害の発生によって、これまで見えにくかったマイノリティの立場に置かれた人たちの存在や、災害の影響が深刻に及ぶ人たちのことが浮き彫りになるケースがあります。私も震災後、周りの友だちとの違いを強く感じることもありました。社会の大多数の人たちと異なる立場に置かれた場合、精神的に不安を抱えたり、孤独感や恐怖感を抱いたりすると思います。だからこそ災害後は「自分が自分らしくいられる」場所の存在が重要だと思っています。学校でも自宅でもない、子どもまちづくりクラブのような「第3の場所」で、そうした気持ちから解放され、自分を取り戻すことができる子どもたちもいるのではないのでしょうか。



地域の人たちのストーリー

「ふれあいセンター」は震災で笑顔を失った人たちが笑顔を取り戻した場所
 岩手県山田町教育委員会事務局生涯学習課文化係
 澤木 次博さん（岩手県山田町）



山田町の子どもまちづくりクラブのメンバーが企画・デザインをした山田町ふれあいセンター「はびね」で、初代センター長に就任しました。「ふれあいセンター」には、子どもたちの「全世代の人たちが利用でき、憩い、学び、交流の場になってほしい」との願いが込められています。山田町は、その願いが施設完成後も引き継がれるよう「山田町ふれあいセンター条例前文」を制定しました。

条例前文には、子どもたちの4つの願い「私たちは全世代が利用できる場となることを願います。」「私たちは憩いの場となることを願います。」「私たちは学べる場となることを願います。」「私たちは交流の場となることを願います。」がすべて入っています。子どもたち自身が考えてまとめた、この4つの願いに本当に感動しました。館内は、子どもたちの多彩なアイデアがたくさん盛り込まれ、用途に合わせ誰もが利用しやすいよう工夫がなされています。

大規模な自然災害の発生後、皆が安心してゆっくりと過ごしたり、交流したりできる場所や、地域の人たちのこころの健康が保てる場所も必要です。山田町では、震災で笑顔を失った人たちが、「ふれあいセンター」を通じて笑顔を取り戻してくれました。今後も地域の多くの人たちの笑顔があふれる場所になればいいと思います。



『ミニ』あかりの木」は今でも地域になくてはならないシンボルです

カフェフードバー わいわい
太田 明成さん(岩手県陸前高田市)



陸前高田市の「子どもまちづくりクラブ」も参加した、「東北子どもまちづくりサミット」に地域の人たちも呼ばれ、何回か参加しました。震災後多くの人たちが仮設住宅に住み、遊んだり集まったりする場所が少なくなったことから、「陸前高田市を照らし、みんなが集えるシンボルを作りたい」との子どもたちの発表を聞き、胸が熱くなりました。

ちょうど、仮設商店街に公園を設置するためのスペースとして準備されていた場所があったので、その場所に、「夢のまちプラン」の一つである陸前高田を照らすシンボルモニュメントの設置を提案しました。その後、スペースの都合で当初考えていたモニュメントより小さく制作することが決まり、現在の『ミニ』あかりの木」ができました。『ミニ』あかりの木」の制作が決まってからは、定期的に子どもたちと話し合ったり、制作を手伝ったりもしました。

仮設商店街「高田大隅つどの丘商店街」は2012年6月にオープンし、『ミニ』あかりの木」は同じ年の9月に完成しました。当時から子どもたちの願い通り地域を明るく照らしてくれる存在でしたが、今でもその存在は変わっていません。今でも地域になくてはならないシンボルです。



本人からの提供。画像の無断使用・転載はお断りします。

子どもたちが、想いを地域に発信することで、地域全体で一丸となってその想いを実現できた

石巻市福祉部子ども保育課
門間 一也さん(宮城県石巻市)



震災発生当時、私は石巻市福祉部子育て支援課で放課後児童クラブの担当をしていました。セーブ・ザ・チルドレンが放課後児童クラブや中高生への支援を行うことになり、一緒に活動するようになりました。石巻市の子どもたちの活動を最初から見てきましたが、自分たちのまちのことや復興のために自分たちに何ができるかを考え、声に出したことを具現化していく姿にはとても感動しました。

子どもたちが、自分たちの想いを地域に発信することで、周りの大人たちも年齢や性別、社会的立場などに関係なく、地域全体で一丸となってその想いを実現させるための活動に取り組むことができたと思っています。子どもたちは少しのサポートがあれば、「石巻市子どもセンター らいっく」のような大きなプロジェクトも成し遂げることができる。子どもたちの可能性は無限なんだと感動しました。

また、放課後児童クラブでは被災した支援員が被災した子どもたちと接するケースもあったため、支援員に対してのこころのケアも重要でした。セーブ・ザ・チルドレンなどの協力も得ながら、支援員への研修や情報交流会の実施といった支援員へのこころのケアの支援を通して、子どもたちに対するきめ細やかな保育が実現できたのではないかと感じています。



地域の人たちの意見を尊重し、地域の人たちに寄り添いながら新しい住まい・まちづくりをしていきたい

株式会社象地域設計勤務
澤田 大樹さん(岩手県)



子どもたちのファシリテーターとして、週末に山田町の「子どもまちづくりクラブ」の活動に参加したり、「東北子どもまちづくりサミット」や「子どもまちづくりリーダーツアー」に参加したりしました。

ファシリテーターとして、どうしたら子どもたちの意見をうまく引き出すことができるのか、常に考えていました。特に意見が出ないとき、発言のない子がいるときは無理にその場を盛り上げたり、意見を言うよう強いるのではなく、誰もが意見を言いやすい雰囲気をつくったり、意見が出ない理由を考えて、必要な情報をインプットしたりしました。そして、一人でも反対意見が出たときは見過ごさず、その理由を聞いて皆で考えるようにして、少しでも子どもたちの本音を引き出すように努めました。

現在は、住宅の設計や、まちづくりコンサルタントとして地域に関わっていますが、その人たちの意見を聞き、尊重し、地域の人たちに寄り添いながら、新しい住まい・まちづくりをしていきたいと思っています。地域の人たちの本音を引き出すことや、意見を押し付けることなく一緒に考えていくという姿勢はファシリテーターとして活動していた経験が活かされていると感じます。



支援への感謝を忘れず エネルギーに変えいつか子どもたちが支える側に

相馬市中央児童センター
門馬 美樹さん(福島県相馬市)



セーブ・ザ・チルドレンが取り組む福島の子ども支援事業「フクシマ スム プロジェクト」の一環で、「相馬市中央児童センター第2児童クラブ」の建設や、児童センターの職員研修などの支援を受けました。「相馬市中央児童センター第2児童クラブ」の建設では、ロッカーの大きさ、トイレや水道の蛇口、窓ガラスなど細かい部分まで、現場の声を反映してくれたことに感動しました。震災後、遊ぶ場所が制限され、子どもたちへの影響が懸念されていましたが、クラブの建設により活動スペースが広がることで、子どもたちのストレスも軽減されたのか子どもたち同士のトラブルが減りました。また、職員も新しい設備が整った施設で、余裕をもって指導にあたることができました。

支援を受ける側も感謝を忘れず、受けた支援をエネルギーに変え、子どもたちを支えていくことが重要だと思います。そして、子どもたちが大きくなったときに、今度は誰かを支える側になっていけば良いと感じます。こうしたことが当たり前になるように、私自身、子どもたちに、「誰がどんな気持ちで支援してくれたのか」を伝えていきます。今後も、地域やセンターに来てくれる子どもたちや保護者とのかかわりを大切にしながら、自然と助け合いができる関係をつくっていききたいと思います。



本人からの提供。画像の無断使用・転載はお断りします。

accenture

地域に貢献できる人材を育成することで地域の復興を支援していきたい

アクセントチュア株式会社
ビジネス コンサルティング本部 ストラテジーグループ マネジング・ディレクター
藤井 篤之さん



当時アクセントチュアは、セーブ・ザ・チルドレンのグローバルパートナーとして、社会貢献活動の一環で掲げていたグローバル統一テーマ「Skills to Succeed」(スキルによる発展)という考えのもと、人材育成にも取り組んでいました。セーブ・ザ・チルドレンの東日本大震災復興支援事業との連携の一つとして、地震や津波の被害に加え、原子力発電所の事故の影響も受けていた福島県の子どもたちが将来のためのスキルを身に付けることを目的とした活動を共同で実施することになりました。

2013年より農業がさかんな福島県で農業を学ぶ高校生を対象に、経営・マーケティング授業を行いました。当初、皆の前で発言をすることが苦手な生徒がほとんどでしたが、授業では必ず発言する機会をつくりました。生徒たちは次第に堂々と皆の前で発表できるようになりました。

私たちのプログラムに参加した生徒たちのなかで、「自分の進路についてより真剣に考えるようになった」、「マーケティングに興味を持ち、大学などでもっと勉強したいと思うようになった」といった声を聞くと本当にうれしいです。私たちは現在も福島県や宮城県内の複数の高校で活動を継続しています。これからも、地域に貢献できる人材を育成することで引き続き地域の復興を支援していきたいと思っています。

SUNTORY

従業員一人ひとりが「自分ごと」として身近に感じ被災地に寄り添える支援を

サントリーホールディングス株式会社
コーポレートサステナビリティ推進本部 CSR推進部
榎 悠里さん



当社では、復興支援活動に取り組むにあたり、セーブ・ザ・チルドレンとともに被災地の皆さまのニーズについてヒアリングを行い、まずは東北の主要産業である漁業の未来を担う水産高校の学生への奨学金支援を行うことに決定しました。

また、福島県出身の従業員からの声も受け、原子力発電所事故の影響を受ける福島県の子どもたちへの支援として、事故の影響が少ない場所で子どもたちがのびのびと遊ぶことのできる場を提供したほか、「フクシマ スム プロジェクト」を立ち上げ、県内5ヶ所の放課後児童クラブ(学童保育)の支援や子ども支援に取り組むNPOへの助成事業なども実施しました。さらに、子どもまちづくりクラブで活動する子どもたちの夢をかなえるため「石巻市子どもセンター らいつ」や、山田町ふれあいセンター「はびね」の建設を支援しました。

当社は創業の精神のひとつである「利益三分主義」という価値観を大切にしています。セーブ・ザ・チルドレンとの活動を通して、この価値観が会社としての社会貢献活動に対することだけでなく、従業員のなかで「自分ごと」としてより身近に感じられるようになったのではないかと考えています。これからも引き続き東北の被災地の皆さまに寄り添った息の長い支援を続けていきたいと思っています。

SONY

次世代を担う子どもたちのため中長期にわたる復興支援を

ソニー株式会社
サステナビリティ推進部CSRグループ シニアマネジャー 岡田 康宏さん
サステナビリティ推進部CSRグループ CSRマネジャー 杉村 菜穂さん



ソニーは「For the Next Generation (次世代のために)」を社会貢献活動のスローガンとしています。セーブ・ザ・チルドレンのビジョンと重なる部分が大きかったため、東日本大震災発生後、協力して子どもたちの支援を始めることになりました。2011年6月に共同で「RESTART JAPANファンド」を立ち上げ、「教育」「子どもの保護とケア」「創造的活動」に重点を置いた、中長期にわたる復興支援に取り組みました。

ファンドには、当社を含む複数の企業からの支援金や社員からの募金に加え、アーティストやタレントなど約170人によるチャリティソングの売り上げなども寄付されました。また、被災地の子どもたちが日常生活を少しでも早く取り戻し、夢や希望を持ち続けてほしいとの願いから「RESTART JAPANファンド」で集まった資金で、震災の影響で中断した学校や地域のスポーツ・文化活動の再開をサポートする「夢実現プロジェクト」を実施しました。実際に私たちの活動に参加した子どもたちのなかで日本代表に選ばれるほどのスポーツ選手になった、夢を実現した、という話を聞くと本当にうれしく思います。

これからも、セーブ・ザ・チルドレンとのパートナーシップのもと、自然災害発生直後や人道危機などの緊急時をはじめ、中長期にわたって次世代を担う子どもたちを支援する取り組みを継続していきます。

LANXESS
Energizing Chemistry

従業員を巻き込みながら被災地の子どもたちが楽しめる教育機会を

ランクセス株式会社
コーポレートコミュニケーションズ 日本統括マネージャー
村上 幸さん



当社は「Good for business, good for society (ビジネスへの貢献、社会への貢献)」の理念を掲げた企業活動を展開しています。なかでも教育への取り組みは企業理念の重要な柱のひとつとして位置づけられています。

震災後、現地のニーズに寄り添った支援をしたいと考えていたところ、セーブ・ザ・チルドレンのスタッフより「被災地では夏休みの遊びが限られている」と聞き、社内で検討を重ねた結果、夏休みに「化学実験教室」を実施することになりました。また、化学実験教室のほかにも岩手県山田町・陸前高田市、宮城県石巻市の「子どもまちづくりクラブ」の活動支援、山田町の仮設子どもセンター「KYTみんなのひろば」の建設支援なども行いました。

化学実験教室は、2020年で7年目を迎えました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響でオンラインでの開催となりましたが、私自身、毎年化学実験教室に参加しています。参加した子どもたちが新しい発見をして目を輝かせていたり、「すごい!」と好奇心に満ちた表情をしたりしている姿を見ると、大変うれしい気持ちになります。

今後も、セーブ・ザ・チルドレンと連携し、従業員を巻き込みながら、持続可能な支援を継続していきたいと思っています。

スタッフからのメッセージ

東日本大震災緊急・復興支援のさまざまな活動に携わったスタッフからのメッセージをご紹介します。

※スタッフの写真は、東日本大震災復興支援活動当時のものです。



インタビューを読んで思い出したある子どもの声。「復興は『おとなの仕事』という以前の私の考えは180度変わりました！子どもだって参加します。想いがあります。伝えるから、受けとめてください。」子どもは守られるだけの存在ではなく、地域の一員であり復興の主体者です。インタビューで子どもたち自身がそう実感していたうれしく思うと同時に、子どもたちの参加する権利が十分に保障されていない現実をどうするか、問いかけられたようにも感じました。これからも子どもたちとともにつくる社会の実現を目指して、活動していきたいと思います。

国内事業部子どもの貧困問題解決事業プログラムマネージャー 田代 光恵



2011年当時、私は岩手県で子どもたちと活動していました。発災直後に避難所となった学校の体育館、仮設商店街の一角、地域の協力によってできた子どもの居場所など、さまざまな場面でさまざまな子どもたちと接し、それぞれの想いを聞いてきました。

「子どもが大人から学ぶことがあるように、大人が子どもから学ぶこともあると思うのです。」ある子どもが国際会議の場で伝えた言葉のように、東日本大震災以降も地震や風水害が頻発するなか、子どもが必要としている支援を届けるとともに、子どもの声から学びを得ていく姿勢を常に心がけていきたいと思っています。

国内事業部国内緊急対応事業プログラムオフィサー 山田 心健



発災直後の避難所で「こどもひろば」の運営を担当していました。そこで出会った子どもたちと交わした会話は、今でも鮮明に覚えています。

5年間の支援活動では、さまざまな地域の方と間近で仕事をする機会を得て多くのことを学びました。そのなかで、「私たちがすべきことは何か。何のために支援活動を行うのか」という本質的な問いを突き付けられ、当時のスタッフと試行錯誤しながら活動を進めてきました。

この経験から得た学びを今後の防災と災害支援に活かすことが私たちの使命だと思い活動を続けています。

国内事業部国内緊急対応事業プログラムマネージャー 赤坂 美幸



私は福島事務所の一員として当時の活動に携わるなかで、たくさんの方と出会いました。自らが被災していたり、子育て真っ最中の親であったりするにも関わらず、多くの方が地域の復興のために尽力していました。また、複雑な事情の板挟みとなりながら地域行政や教育に携わる方々が懸命に職務にあたっていた姿も忘れられません。失い、傷つき、理不尽な目にあうことも一度や二度ではなかったと思います。その後の10年を歩んでこられたことは、ただそれだけで価値があり、今後の皆さん一人ひとりの背中を押す力になってくれるのではないかと考えています。

子どものセーフガーディング担当 金谷 直子



2011年3月下旬から東日本大震災緊急支援・復興支援に携わりました。

以前から当事者皆さんの社会参加・意見表明のサポートをする業務やボランティア活動にかかわっていたので、東北の子どもたちが、世界に向けて復興や防災について意見表明する機会や海外の子どもたちと意見交換をする機会をサポートしました。子どもの権利を推進する団体として、意見表明を通じた子どもたちの地域の復興への意義ある参加を、緊急・復興支援事業の柱のひとつに据えて実施できたことをうれしく思います。

事務局次長 高井明子



当時、震災後の復興事業を資金面でサポートするため頻りに現地に訪問していました。ある時、東京へ戻る際に団体の赤いTシャツを着て高速道路の休憩所で休んでいると、一人の女性が話しかけてきて、「孫が避難所でセーブ・ザ・チルドレンのスタッフに大変お世話になっている。ぜひよろしく伝えてほしい」と、私たちの乗った車が見えなくなるまで深く頭を下げて見送ってくれた光景が今も頭に浮かびます。復興支援という形で国内の事業を始めて間もない時期から、復興に関わる取り組みの一翼を担えたことを貴重な経験として心に刻んでいます。地域に寄り添い、子どもの可能性を引き出すことを忘れずに、これからも子どもたちを取り巻く多様な課題の解決に向けて取り組んでいきたいと思っています。

パートナーリレーションズ部部长 兵頭 康二



海外事業を中心に活動していたセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが東北の被災地で受け入れられるのか。発災直後の混乱する避難所で「こどもひろば」の様子を見ていたら、私のそんな心配はすぐに払拭されました。被災自治体・地域・国内外の企業の方々と連携した教育・福祉・文化・経済の支援や活動を通じて、子どもたちが成長し、子どもの意見が地域を変えることができると教えてくれた10年。支援とはモノだけではなく、困難を乗り越える力をともに育むこと。成長した被災地の子どもたちを見て、いま思うことです。

株式会社横山芳夫建築設計監理事務所代表取締役兼セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン理事 横山 英子



当時、私はセーブ・ザ・チルドレンのアドバイザーとして事業にかかわっていました。

子どもは保護の対象であり、子ども支援といえはこころのケアが主流であったなか、セーブ・ザ・チルドレンは子どもまちづくりクラブをはじめとした子ども参加の事業も展開していました。子どもたちのインタビューからは、大きな災害を経験しながらも、周囲に支えられつつ、自分で考え行動できるように変化していった様子が見て取れます。災害などの外傷体験の後に見られる成長を示す言葉に、心的外傷後成長 (PTG: posttraumatic growth) があります。東日本大震災緊急・復興支援活動はまさに、子どものPTGを促す活動であったといえるのではないのでしょうか。

工学院大学教育推進機構准教授兼セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン理事 安部 芳絵

2012年から2年間、東日本大震災復興支援に携わりました。当時世界各地からたくさんのご支援があり、私は海外のセーブ・ザ・チルドレンとの連携を担当しました。

私たちの活動は、子どもたちとその家族に支援を届けただけでなく、コミュニティや地域で活動する各組織にも長期的な変化をもたらしたと思っています。私が最も印象に残っているのは、あらゆる側面でも多くの人たちが同じ志のもと協働したことであり、子どもたちの強さやレジリエンスです。子どもたちが日本の将来を明るくするものと思っています。

ミユキ・サトウ

(セーブ・ザ・チルドレンUSAから派遣され東日本大震災復興支援に従事。現在はセーブ・ザ・チルドレン エチオピア事務所勤務)

私が8ヶ月間東日本大震災復興支援に関わったなかで最も印象的だった事業のひとつに「子どもまちづくりクラブ」の活動があります。地域の復興に向けて子どもたちが意見をまとめ、そのアイデアを地域の人たちと共有し、主体的に復興に関わっていました。

今でも、子どもたちが本物の「ロックンロール・シティ (石巻市)」をつくろうと話していたことは覚えています。また、放課後児童クラブ支援も印象に残っています。東日本大震災復興支援に携われたことに深く感謝しています。

ブリトニー・クリスタル

(セーブ・ザ・チルドレンUSAから派遣され東日本大震災復興支援に従事。現在はNPOを立ち上げ活動)

東日本大震災から10年—いま伝えたい想い

本冊子で紹介するセーブ・ザ・チルドレンと一緒に活動してきた子どもたち、地域・企業の皆さんのストーリーや、活動資料はウェブサイトでも紹介しています。ぜひ、ご覧ください。

https://www.savechildren.or.jp/tohoku_10th





Save the Children
セーブ・ザ・チルドレン

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
TEL: 03-6859-0070 www.savechildren.or.jp

2021年3月発行